

大和川を守る

— つけかえとその後 —

2007年9月25日～12月9日

柏原市立歴史資料館

大和川。わたしたちは、この川を何気なくながめていますが、大和川は、わたしたちを洪水から守るだけでなく、豊かな自然とともに、わたしたちにやすらぎを^{あた}与えてくれる川でもあります。そして、この川は、むかしからたくさんの人の知恵と努力^{ちえ どりよく}によって守られてきたのです。

むかしから洪水^{こうずい}をくりかえしてきた大和川は、今から300年ほど前につけかえられました。つけかえは、たいへんな工事だったようですが、どうして川をつけかえなければならなかったのでしょうか。また、どのようにして川をつけかえたのでしょうか。そして、その後^ごはどのように川を守ってきたのでしょうか。ここで、それらについて考えてみましょう。

つけかえまでの大和川

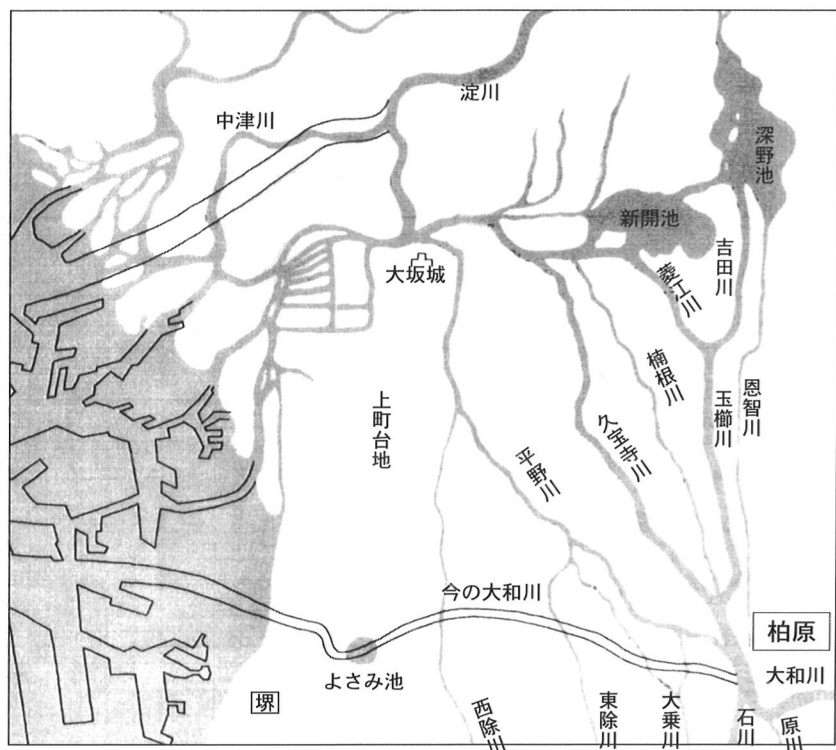
つけかえまでの大和川は、久宝寺川^{きゅうほうじがわ}（長瀬川^{ながせがわ}）や玉櫛川^{たまくしがわ}（玉串川^{たまくしがわ}）など数本の川に分かれ、大坂城^{よどがわ}の北で淀川^{よどがわ}（大川）に流れこんでいました。しかし、大雨になると水がうまく流れず、堤防^{ていぼう}が切れたり、堤防^{ていぼう}から水があふれたりして、たびたび洪水^{こうずい}をおこしていました。くりかえされる洪水^{こうずい}に、人々は苦しみ、大和川をつけかえてほしいと願う運動が始まりました。

しかし、いつまでたってもつけかえてもらえませんでした。それは、つけかえに反対する人たちがたくさんいたからです。反対する理由は、新しい川ができると自分たちの土地がなくなるかもしれない、それまでなかった洪水^{こうずい}が起こるようになるかもしれないなどでした。それでも洪水^{こうずい}はひどくなるばかりで、ようやく元禄^{げんろく}17年（宝永元年・1704）につけかえ工事がはじまりました。

大和川のつけかえ

2月にはじまったつけかえ工事は、10月に完成^{かんせい}しました。今のような機械もない時代に、わずか8ヶ月で、あの大きな大和川を作ったのです。川の幅^{はば}180m、長さ14.3km、堤防^{ていぼう}の幅20m以上。毎日1万人以上の人をはたらき、7万両以上のお金がかかったようです。1両を20万円として計算すると、140億円ほどのお金がかかったことになります。

大和川のつけかえを願って運動をしていた今米村^{いまごめむら}（今の東大阪市）の中甚兵衛^{なかじんべえ}は、つけかえ工事も活躍^{かつやく}しました。そのときに甚兵衛^{じんべえ}が着ていたという陣羽織^{じんぼおり}が残されています。このようにして、洪水^{こうずい}で苦しんでいた人々は救^{すく}われることになったのです。



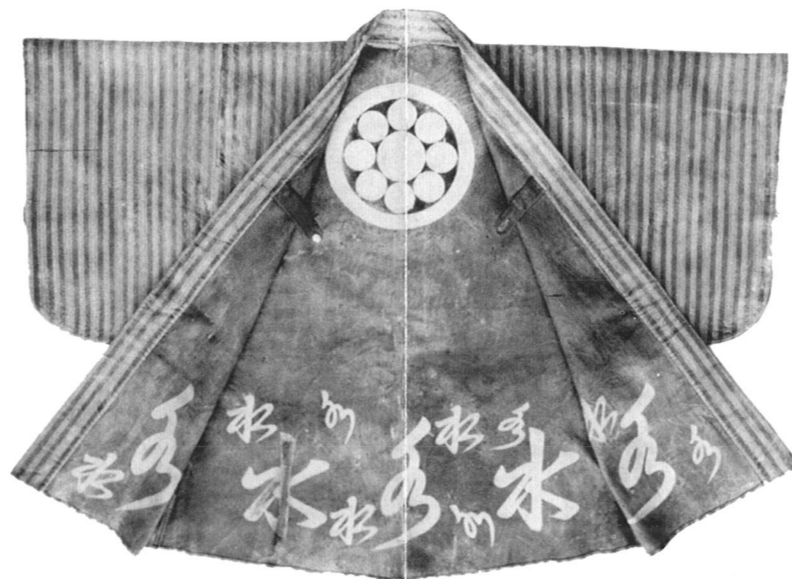
つけかえ前の大和川

つけかえまでの大和川は、数本の川に分かれて、北または北西に流れていた。これらの川は、大坂城の北で1本に集まり、もとの淀川（今の大川）に流れ込んでいた。また、今の大東市から東大阪市にかけて深野池や新開池という大きな池があった。



つけ替え嘆願書 (N-070601)

貞享4年(1687)に、大和川の流をにつけかえてほしいとお願ひした文。毎年のようにおこる洪水に苦しみ、このままでは餓死するしかないと訴えている。しかし、つけかえは認められず、これ以後は、つけかえをあきらめて、川の水が流れやすくなるような工事をしてくださいというお願ひに変わっていく。



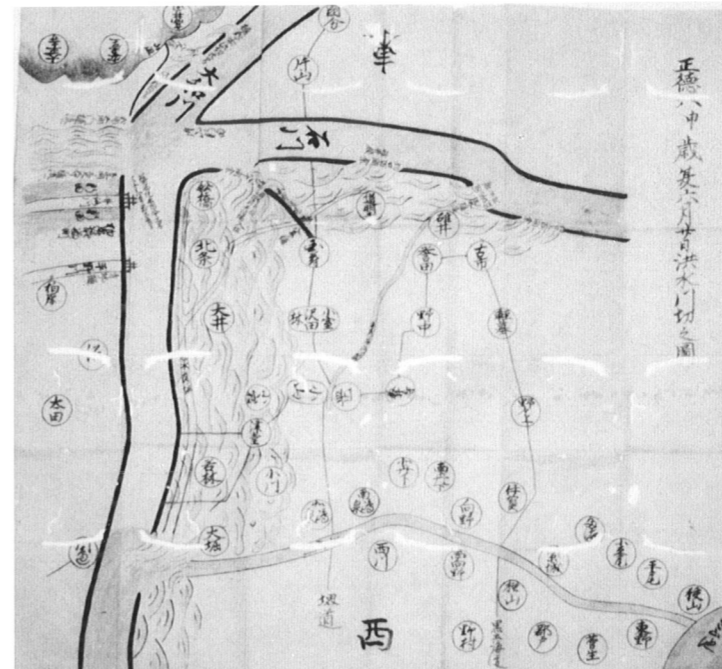
中甚兵衛着用の鹿革陣羽織 (N-070602)

中甚兵衛が、つけかえ工事のときに着ていたと伝えられる陣羽織。鹿の革で作られた、着物の上に着る上着である。その内側に3種類の字体で「水」と書かれており、新大和川に水がうまく流れるようにといのる中甚兵衛の思いがこめられているようである。



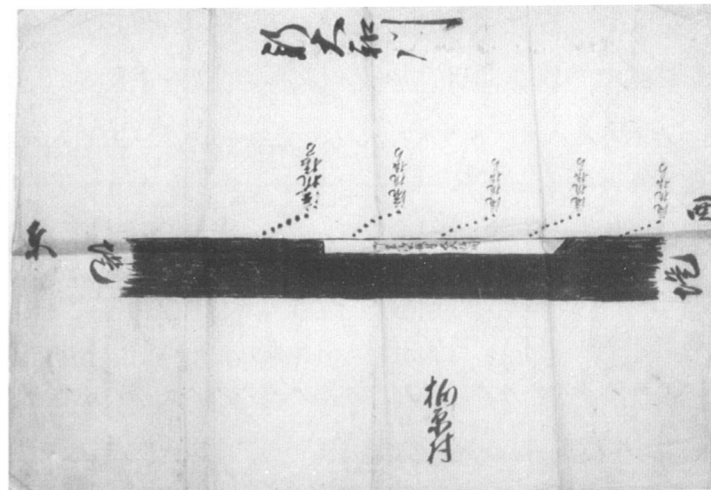
中甚兵衛肖像画 (N-070603)

中甚兵衛の姿を描いた絵。大和川のつけかえが行われた次の年、甚兵衛は67歳で出家した。この絵は、その後に描かれたものである。出家とは、僧（お坊さん）になることであり、そのため頭の毛も剃っている。



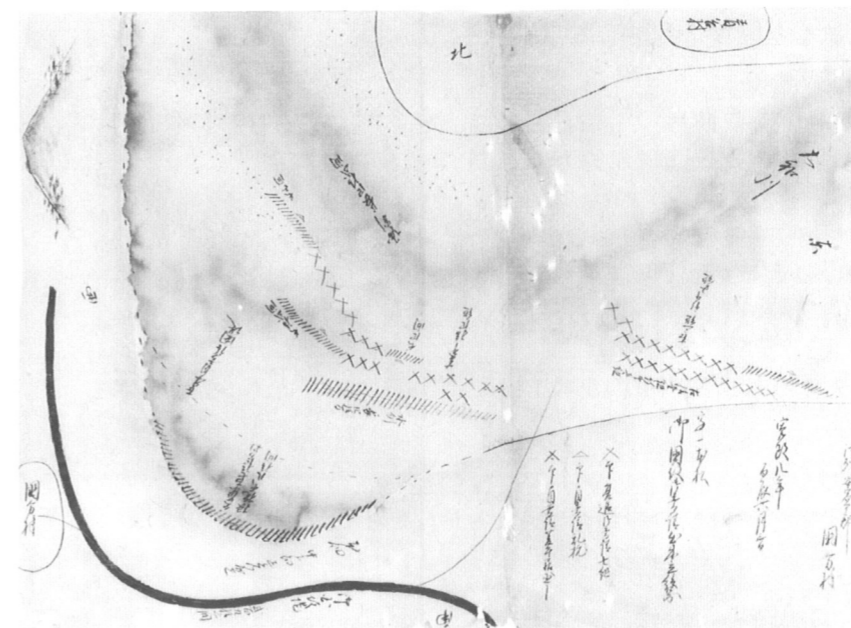
「洪水川切之図」(藤井寺市立図書館蔵)

正徳6年(享保元年・1716)の洪水のようすを描いた絵図。築留・石川・東除川の堤防が切れたことがわかる。とくに大和川の南側、現在の藤井寺市付近の被害が大きかったことを示している。



新大和川流杭配置絵図

長さ50間(90m)にわたって堤防の土を積みなおし、川に杭(流杭)を10間(18m)の長さで5ヶ所に打ったことを記録した絵図。



御国役御普請出来立絵図(個人蔵)

寛政8年(1796)、大和川が大きく曲がる部分に、堤防を守るために杭を打ったり、菱牛をならべたりしたことを描いた絵図。菱牛とは、数本の木材をピラミッドのように組み合わせたものである。

